

学位論文審査の結果の要旨

1. 申請者氏名	伊住 継行
2. 審査委員	主査：(岡山大学教授) 青木多寿子 副主査：(岡山大学教授) 三宅 幹子 委員：(鳴門教育大学 特命教授) 山崎 勝之 委員：(岐阜大学教授) 柳沼 良太 委員：(岡山大学教授) 熊谷慎之輔
3. 論文題目 児童の自己理解を促すICC(Incorporated into a Cross-Curriculum)心理教育の開発と介入に関する研究―「道徳的強み」の自覚と活用の観点から―	
4. 審査結果の要旨 学校教育実践学専攻 学校教育方法連合講座 伊住継行から申請のあった学位論文について、兵庫教育大学学位規則第16条に基づき、下記のとおり審査を行った。 論文審査日時：令和3年2月15日(月) 15時10分～16時35分 形式：Zoomによるオンライン形式 1. 学位論文の構成と概要 第1章 問題と目的 本研究の目的は、児童の「道徳的強み」(Character Strengths)の自覚と活用を促すために、教育課程上の複数の教科・領域に位置付いた心理教育(ICC 心理教育)プログラムを開発し、教育現場への介入方法および教育成果を検証することである。 まず始めに新学習指導要領の方向性を整理した結果、キャリア教育、特別活動、道徳科において自己理解を促そうとする傾向が顕著に見られることを指摘した。次に児童期の自己理解の特徴、自己理解を促す教育実践に関する先行研究を概観し、その課題を整理した。さらにこれらを解決するために、キャラクター・ストレングス・プログラム(Character Strengths Program：以下 CSP)を援用することを提起し、国内外で児童を対象に実践されたCSPの先行研究を概観して実践の特徴と課題をまとめた。最後に学校教育でCSPを実践する際の2つの課題、つまりプログラムを教育課程に位置づけること、プログラムの実践者となる教師へ支援体制の必要性について述べた。 第2章 児童に対する短期間のキャラクター・ストレングス(Character Strengths)活用研究 児童が自らのCSを自覚し、活用できるのか、また、CSの活用がwell-beingを向上させるのか、について探索的に検討することを目的として、小学校4、5年生を対象に短期の介入研究を行った。その結果、児童は自らのCSを自覚し、様々な方法で活用できることが示された。また、CSを活	

用することで well-being に有意な向上が見られ、3 週間後も自らの CS を自覚し、活用していることが明らかになった。このことは、児童にとって CSP は有効な心理教育になり得ることを示している。他方で CS の活用ができなかった児童、活用に困難を抱えていた児童も見られた。

第3章 自己理解を促す ICC(Incorporated into a Cross-Curriculum)心理教育の開発

CSP の有効性が確認されたので、道徳的強みの自覚と活用を目指す CSP を教育課程に位置づけることを目指した。具体的には道徳科の「個性の伸長」をねらいとする授業と学級活動(2)の人間関係形成、学級活動(3)の目標をもって生きる態度の育成をねらいとする2教科7時間のクロス・カリキュラムとして ICC 心理教育プログラムを開発した。

第4章 ICC 心理教育の普及方法の開発

開発したカリキュラムを普及させるには多くの実践者に実施してもらう必要がある。そこで実践者への広域支援体制の構築を試みた。具体的には著者が学習指導案や教材の作成及び授業の趣旨や目的の説明、授業観察を行って直接的に支援した。実践中は、SNS を用いて実践者全員で板書や児童の発話、注意点等を瞬時に共有するような支援体制を構築した。実践者同士の SNS の会話を分析した結果、SNS が有効に機能し、実践者が互いにサポートし合う様子が確認された。

第5章 ICC 心理教育の教育成果の検証

複数の小学校の5, 6年生を対象に複数の実践者で ICC 心理教育を実践し、プログラムの教育成果の検証を行った。CSP 群と比較群を設けて検討した結果、強み活用において CSP 群で実践の成果がみられる傾向があった。強み認識では、群と性別で交互作用に有意な傾向が見られ、CSP 群の女子で強みの認識が高くなる傾向が見られた。自由記述の分析では75名(73.5%)がCSの自覚について記述し、58名(56.9%)がCSの活用について記述していた。テキストマイニングによる分析の結果、CSの自覚と活用に関わる語句が男女共に頻出していることがわかった。

第6章 総合考察

本論文のまとめと今後の課題についてまとめた。その中で CS の自覚と活用を促す促進型の ICC 心理教育を開発・普及する意義を考察し、今後の課題をまとめた。

2. 審査経過

本研究の結果、道徳的強みの自覚と活用を促すプログラムは、児童の心理教育の一つとなり得ることが示された点、心理教育の中でも、従来の予防型とは異なる側面、つまり児童が自分自身の資質(自助資源)を自ら自覚して自らの強みを育てゆくことを促す促進型の心理教育になり得る点、促進型であるが故にキャリア教育の充実にも貢献しうだけでなく、学級経営、学校経営にもつながる可能性を持つ点、さらに論文の全体の論理構成が優れている点が評価された。

3. 審査結果

以上により、本審査委員会は、伊住継行の提出した論文は、博士(学校教育学)の学位を授与するのにふさわしい内容であると判断し、全員一致で合格と判定した。